

苦難の時代

山田 昌(やまだ まさ)91歳

戦争を知る人も、だんだんと少なくなって行く今、私も、九十一才になり、昭和十六年に小学校五年生だった事は忘れて行く様になり、今、心に残っている、あの恐ろしい戦時中の、最前線での兵士はもとより国に残っている国民も大変だった事は、戦争を知らない若い人に少しでも知ってもらいたくて書きました。書いた以上にまだまだ大変でした。若い人にもこの平和が続く事を願って書きました。

今年で戦後七十六年、遠い過去となって、終戦というのは、テレビでもよく言っていますが、知る人も多く、しかし始まったのは、昭和十六年十二月八日、当時私は、小学校五年生の時でした。

朝早くからラジオのあの勇ましいマーチと共に、「大本営発表……」と云う放送に日本中が沸き上がりました。学校へ通う道では、人々が「日本は大勝利や」とさわいでいました。学校でも教室の黒板に、世界地図を出して、こんな大国と戦争を始めて大勝利と先生の説明がありました。

小学生の私には、なぜ戦争が始まったのか、わかりませんでした。十二月八日は、「大召奉戴日」になり、小学校も全国すべてが国民学校と云う名に変わり、放課後に「ナギナタ」が入り、「エイ」、「ヤア」とやりました。毎月八日は地域の神社に集合して、みんなで必勝祈願をして、赤紙で招集されて出征する兵士の家では、背の高い「のぼり」が上がり、学校の運動場では、地域の兵士の見送りがあり、生徒も毎日の様に旗を振って、「我が大君に召されたる…」と云う歌詞の「出征兵士を送る歌」を唄って送りました。

だんだん、始まった時より世の中が変わり始めていき、戦地へ送る武器が不足しているので、「銅や鉄の少ない日本だから今度お寺の鐘が召集されることになり送り出しましょう」と言うようになりました。戦争に行く釣鐘の事を先生が言ったら、今の子ども達はきっと「へエ、お寺の鐘が出征やて…」と笑うでしょうが、その時は、誰一人笑う者はいませんでした。

運動場に、赤いタスキを掛けて大小の鐘が、すまし顔で座っていました。そしてみんなで「のぼる旭日の輝きに、たそがれなびく雲を越え、戦(いくさ)に進む釣鐘よ、広い世界へ鳴りひびけ」と唄いました。タヤみせまる道を、馬力(馬が引く荷車)にのせられて、ひづめの音と共に消えて行きました。タヤみせまる秋のもの淋しい日でした。

それからは、「進め一億火の玉だ」と云うポスターがあちこちに貼られて、戦地の兵隊さんに銃後の守りは固い事を手紙に書いて送ったり、出征して人手の足りない農家に草引きに行ったり、何でもお国の為と云う事で変って行き、物資が不足して、主食や衣料品も配給制度にvariキップになりました。

店は閉めてしまう所が多く、少しでも開いていれば、人々は品をもとめて行列が出来て、お金では買えなくなって、物々交換が始まりました。みつかれば「やみ」をしたらろうと云って警察につれて行かれる始末、終戦までは言うに言えない事が、山積みありました。

苦しい時代に生きた者の事を、忘れてほしくありません。十二月八日、八月十五日は、今一度、過去の事を思い出し反省の日になればと思います。若い人にはよくわからないかもしれませんが、どうにも出来ない苦難の時代もあった事を知ってほしくて書きました。